

# アクティブラーニング型授業「舞姫」の場合 —授業中の発表及び交流活動における外化と内化—

小川 満江

## 1 はじめに

別稿で「アクティブラーニング型授業『舞姫』の場合—発表資料に見られる認知プロセスの外化—」について報告した。本稿では、平成 28 (2016) 年度、平成 29 (2017) 年度に実施した授業での発表及び交流活動を整理しつつ、認知プロセスの外化と内化がどのように行われているか分析していきたい。対象生徒はいずれも、尾道北高等学校 3 年文系 C 講座の生徒で、使用した教科書は『精選現代文 B』(東京書籍)である。

## 2 平成28 (2016) 年度の場合

生徒数は 20 名 (男子 6 名・女子 14 名) で、生徒の発表と質疑及び授業者の補足説明に 13 時間かけている。

発表資料の形式は別稿で示したⅡのタイプ (資料の上段に本文を載せ、下段に「気づき・解釈・感想・疑問等」、資料の左端に「全体を通して考えてみたいこと・感想」を書かせる形式) である。

次に示すのは、20 名の生徒 (①~⑳) それぞれの〈A 発表及び交流活動の主な内容〉と〈B 授業者の助言・介入〉を、まとめたものである。各担当範囲の主な内容と教科書のページ・行をはじめに示している。

### ① 小説の冒頭・回想の始まり・悔恨の思い (二九〇・1~二九二・7)

A 本文を根拠にしたまとめ方でわかりやすいという感想が述べられた。「人知らぬ恨み」について担当者の場合だったらどのようなことが考えられるのかという質問があり、担当者はやや困惑した感じで応答していたが、その質問に対して「叙述からあまり離れないように読みを深めなければならない」という意見も出た。

B 担当者は「留学先で何が起きてしまったのだろうと続きを読みたくさせる文章だった」「読者の想像を掻き立てるような表現をしていると感じた」と述べていたが、具体的な指摘はなかったので、続きが読みたくなった理由や、どの表現に想像を掻き立てられたかなどを担当者に問いかけるとともに、冒頭の一文の吟味や日記が書けない理由の描き方、「人知らぬ恨み」などについて全体に考えさせた。読み方については、叙述に即して読むことも、自分だったらどうするかということを考えながら読むことのどちらも大切だということを加えた。

### ② 豊太郎の人物像・功名の念と勉強力を持ちベルリンに (二九二・8~二九四・6)

A 担当者は「某省に出仕して」「隊々の士女を見よ」など細かな表現に着目し、見解をまとめた。「某省に出仕して」という箇所については「豊太郎は過去の栄光をどうしてもよく思っている。誇りに思っていたら『某』とは言わずきちんと覚えている」という担当者の見解に対して、「思い出したくなかったのではないか」などの考え方も出された。「隊々の士女を見よ」については担当者の説明に共感しつつ、豊太郎の驚きやはなやかな街の様子を確認しあった。担当者から「菩提樹下と訳する時は幽静なる境なるべく思はるれど」が口語訳できずよくわからなかったとあったが、

「菩提樹」という語には神聖な雰囲気があるという考えが出されたりした。

B 鷗外自身は陸軍省に出仕していたことを加えた。「菩提樹下と訳する時は幽静なる境なるべく思はるれど」は、他の生徒にとってもわかりにくい箇所であったようなので、プリントで補足説明をした。

**③ 有能な豊太郎・大学で聴講（二九四・7～二九五・3）**

A 各段落から読み取れる登場人物の状況と人物像を自分の言葉で簡潔にまとめており、生徒からも「よく理解できた」「豊太郎の人物像がわかりやすくまとめられている」などの感想が述べられた。質問としては、担当者が触れていなかった〈「法家の講筵につらなる」とあるが、なぜ法家を選択したのか〉〈当時のドイツの大学はどのような特色を持っていたのか〉などが出され、生徒同士が考えを出し合う中で、その内容は整理された。

B 質問と生徒から出された考えを、プリントにまとめた。

**④ 自我の目覚め・歴史、文学への興味（二九五・4～二九六・4）**

A 担当箇所の前の部分も踏まえつつ、豊太郎の変化や豊太郎自身の我のとらえ方、「奥深く潜みたりしまことの我」が、展開に即して丁寧に整理されている発表資料で、豊太郎の変化がよく理解できたという感想が多くあった。〈「辞書たらんはなほ堪ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず。」というのはなぜか〉という質問に対して、「歴史文学に興味を持っているのだから当然だろう」「法律だと人を決めつける、人を罰するということにつながりそうだ」「法律だと上司の命令に従うことになる」「辞書だと walkingdictionary という言葉もあるからまだうれしさを感じるのでは」「辞書だと母との関係が考えられる」などの見解が出された。また〈「法の精神」とは何か〉という質問に対して明治憲法の話が出た。

B 明治憲法について補足説明をした。「奥深く潜みたりしまことの我」について担当者の「自発的な自分の本性」という表現に対して「自発的という言葉が適切かどうか」と問いかけると、担当者の方から「主体的」という言葉が提示された。

**⑤ 官長や留学生仲間との不穏な関係・弱い心への省察（二九六・5～二九八・5）**

A 叙述に即して周囲の人々とのかかわりや押さえながら豊太郎の人物像をまとめていたが、「どこの文の表現を説明しているのか分かりにくい点もあったのもう少し見やすくまとめられたらよかった。」という反省点をあげていた。質問としては〈「ああ、かれも一時。船の横浜を離るるまではあつばれ豪傑と思ひし身も、せきあへぬ涙に手巾をぬらしつるを我ながら怪しと思ひしが、これぞなかなか我が本性なりける。」における「涙」とはどのような涙か〉〈「かの人々の嘲るはさることなり。されど妬むはおろかならずや。」というのはなぜか〉が出され、生徒にとって分かりにくい箇所のようにであった。

B 質問の整理が生徒の間でうまくできなかった点については〈どの時点で流した涙か〉〈「おろかならずや」の解釈〉〈「我が本性なりける」と自覚したのはどの時点か〉〈「これ」の指示内容〉等、問い方を変えて考えさせた上で、はじめの質問にかえった。「これ」の指示内容については担当者の説明が間違っていたので、確認を促すと担当者自身が間違いに気づき訂正した。

**⑥ クロステル巷でのエリスとの出会い・エリスの涙、訴え（二九八・6～三〇一・4）**

A 「灯火の海」とは、「ところに係累なき外人」とは、「彼」とは、のように疑問点をあげつつ見解が説明されたことについてわかりやすいという感想があった。〈「余に詩人の筆なればこれを写すべくもあらず」について、エリスに関しては細かく描写されているのに、なぜ「写すべくもあらず」というのか〉という質問があったが、エリスの美しさを強調している表現であると生徒の間で

整理された。

B エリスと初めて出会った場面であったが、担当者のまとめではエリスの印象について触れていなかったの確認させた。

**7** エリスの家へ・エリスの事情と豊太郎の援助（三〇一・5～三〇四・1）

A エリスと豊太郎の状況や人物像を自分の言葉でまとめていたが不十分な点もあり、「本文から読みとれることをもう少しプリントにまとめておけばよかった」と反省しつつ、書ききれていない内容については口頭で説明していた。〈「戸を激しくたて切りつ」の理由〉〈「言ひ争ふごとき声」とあるが何を言い争っていたのか〉〈「少女は羞を帯びて」の意味〉〈おのが無礼の振る舞ひせしを詫びて」とあるがなぜか〉〈「人の憂ひにつけこみて」とはどういうことか〉という多くの質問に対して、担当者が明快に返答していた。

B 担当者に対して、筆者がエリスの母を「老媪」と言い表していることの意図の説明や、エリスや豊太郎の行動を「浅はかな行動」と捉えていることの補足説明を促した。担当者はエリスと豊太郎の急接近を自分に引きつけて考え、違和感を持ったのだと考えられる。エリスの部屋を全員に書かせ、全員の図を互いに見させた。平面図、立体図、エリスを描いている図など、タイプの違うものをプリントにして配布した。

**8** エリスとの交際・留学生仲間の中傷・豊太郎の解職・母の死の知らせ

（三〇四・2～三〇五・2）

A これまでの本文の展開を整理した上で、担当範囲の一文目「ああ、なんらの悪因ぞ」を解釈し、次の展開をまとめるという工夫された説明で、生徒は感心して聞いていた。担当者が母の死の理由として①偶然の病死②豊太郎が解職されたことに対する恥ずかしさからの自死③踊り子と交際していることの恥ずかしさからの自死の三点を挙げた上で、当時の郵便制度からして②は考えられないとの説明があった。それを受けて生徒からはさまざまな考えが出されたが、恥ずかしさからの自死ではなく偶然の病死であろうという解釈に落ち着いた。また担当者は母の手紙の内容について、「豊太郎を責める内容？、豊太郎を諫める内容？他？」としていたが、話し合う中で、手紙を読んだときの豊太郎の様子から考えると、責めるのではなく、励ます内容や情けなさを訴える内容、いさめる内容であったのではないかとまとめられた。

B 母の死について、当時の状況からして、諫死という考え方もあるということを確認した。

**9** エリスの生い立ち、状況・エリスとの関係の深まり（三〇五・3～三〇六・12）

A 担当者からエリスの人物像やエリスとの交際の変化、「母にはこれを秘めたまへと言ひぬ」の理由などの説明があった後、〈「恥づかしき業」というのはなぜか〉〈「余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる脳髓を射て、恍惚の間にここに及びしをいかにせん」の意味〉について考えあった。前者については、生徒からは、エリスの視点から「過酷な仕事で、やりたくて仕事をしているのではないから」といった見解が出された。後者はどの生徒にとってもわかりにくい表現であったようである。

B 「恥づかしき業」については衣装などに見られるバレエの様式が明治の日本の男性から見て恥ずかしいと思われたのではないかと解釈を紹介した。「趣味をも知り」を担当者が「趣味をもった」と取り違えていたので訂正した。「余が～及びしをいかにせん」の意味については、「悲痛感慨の刺激」「恍惚」「ここ」の意味や内容の一つ一つ考えさせながら整理した。「恍惚」は他の場面でも使われていた語であるので振り返らせた。

**10** 相沢の周旋により新聞社の通信員に・エリスの家での生活（三〇六・13～三〇八・3）

A 疑問点をあげながら、自分の見解を示している。エリスのことが「彼」と表現されていることへの気づきの説明や人物関係の図式化を、生徒は絶賛していた。担当者が疑問点をあげながら、自らの見解を示していたので、主にそれに沿って話し合われた。〈「掌上の舞をもなし得つべき少女」は直喩なのか、隠喩なのか〉〈「このまま日本に帰っても運が開けるチャンスがないが残って学ぶだけのお金もない」と苦悩しているが、この時はまだエリスを残して日本に帰ることは心配していなかったのか〉などである。後者について担当者は「ついに離れ難き仲となりし」という表現を押さえて、エリスのことを考えていたとしていたが、根拠としてはわかりにくく、〈エリスのことはあまり頭になかったのではないかと〉という見解が出された。担当者が「今、我が同行の一人なる相沢謙吉なり」の「今」について読み取りを間違えていた箇所については、生徒同士で訂正した。他に出示された質問は「怪しみ見送る人もありしなるべし」の理由である。

B 疑問点については生徒同士のやりとりで整理できたので、相沢の行動についてプリントで補足した。

#### 11 民間学に通じる豊太郎（三〇八・４～三〇九・５）

A 「我が学問は荒みぬ」の繰り返し、「異にて」「よりはむしろ」「ことさらに」という比較に関わる表現、「されど」という逆接表現などに着目し、豊太郎の〈今まで〉と〈現在〉の生活や心情比較するという担当者の説明を踏まえつつ、豊太郎の学問への思いについて話し合われ、生徒の間で整理された。

B 「屋根裏の一灯かすかに燃えて」の比喩的表現や「ウィルヘルム二世」「ビスマルク侯」「民間学」についての説明を補足した。

#### 12 明治21年の冬・エリスの妊娠の発覚・相沢からの手紙・天方伯のもとへ

（三〇九・６～三一〇・９）

A 豊太郎やエリスの発言や表情、心情を押さえた、担当者の丁寧な説明から、生徒は内容理解を深めたようだ。話し合われたのは、〈「友にこそ会いは行け」とあるが、名誉を取り戻すチャンスだという期待感があったのか〉〈「彼は凍れる窓を開け、乱れし髪を朔風に吹かせて余が乗りし車を見送りぬ」から読みとれるエリスの様子や心情〉であったが、生徒同士で整理することができた。

B 初めの一文「明治二十一年の冬は来にけり」が物語の明から暗への転換を示すことを補足した。

#### 13 天方伯に謁見・相沢との再会・相沢の忠告（三一〇・10～三一三・2）

A 記号や図を有効に使いながらの丁寧で明快な内容整理に、生徒は感心していた。国名の漢字表記や鷗外の漱石観、「舞姫」がもとになっている歌詞を示した補足参考資料も作成していたが、興味を持って読んでいた。〈「不幸なる閱歴」とはどのようなことを指すのか〉〈相沢が「色を正して」いさめたのはなぜか〉〈「その成心を動かさんとはせず」とはどういうことか〉という質問に対しては担当者が明瞭に答えていて、質問者も納得したようである。

B 相沢が「この一段のことはもと生まれながらなる弱き心より出でしなれば」と豊太郎の「弱き心」に触れていることに着目させ、これまでの展開で弱い心に触れている箇所を振り返らせ、学説を紹介したりした。

#### 14 相沢の指針・豊太郎の承諾、うしろめたさ（三一三・3～三一三・17）

A 一文一文を丁寧に押さえつつ豊太郎の心情や人物像を読み取り、まとめていたので、生徒からも「丁寧に読み解いているので、豊太郎の心情の流れがよくわかった」という感想が述べられた。〈「大洋に舵を失ひし舟人」「はるかなる山」の比喩表現はどのようなことを示しているのか〉〈豊太郎は相沢に対してどのような思いを持っていたのか〉〈「一種の寒さ」の解釈〉について確認

しあった。

B 担当者が本文の叙述から豊太郎の心情説明をする上で「不信感」（「大洋に舵を失ひし旅人が～定かならず」について）や「喪失感」（「一種の寒さ」について）という語を使用していたが、その言葉の意味や豊太郎の心情を確認させて、言葉の選択が適切かどうかを考えさせた。

**15** 天方伯に随行してロシアへ・翻訳と舌人の仕事、活躍（三一四・1～三一六・3）

A 形式段落ごとに内容を整理しながら、疑問点を提示し、自身の見解をまとめるという担当者の発表を踏まえて、さまざまな質問が出て話し合われた。その質問と見解を次にあげる。

○「この問ひは不意に余を驚かしつ」とあるがなぜか。→信頼を得ているとは思っても見なかった。○「我が恥」とは具体的にどういう内容か。→本文の「余は～しばしばなり」の内容をまとめた。○エリスに見送りに来させないようにした理由。→引き止められたら困る。ロシア行きに積極的になっている。○ロシアでフランス語を円滑に使い活躍した豊太郎が描かれているが、このときエリスのことは考えなかったのか。→・充実した仕事をしており、エリスのことは考えていない。・エリスのことが全く心になかったわけではない。○担当者が「豊太郎の悪いくせ」と述べているが、どういう意味か。→周りの人に迷惑をかけてはいけないという意味で。

B 質疑において、生徒から出された見解を整理し、時代背景について補足説明した。

**16** エリスからの手紙・豊太郎自身の地位の明視（三一六・4～三一八・6）

A 担当者はエリスの手紙の内容、豊太郎の状況について、わかりやすくまとめていた。質問は次にあげるように叙述に即したものが多かった。○「文をば否といふ字にて起こしたり」の意味。→自分を見捨てないでほしいという強い気持ちがあられている。○「この文を見て初めて我が地位を明視し得たり」とあるが、手紙のどの箇所を見てそう思ったのか。○「我が鈍き心」とはどんな心か→何も考えてない心。信頼している人には是非も考えず承諾してしまう心。○「相沢がこの頃の言葉の端に、本国に帰って後もともにかくてあらば云々と言ひしは」の解釈。

B 「我が地位」の解釈について不十分な点について補足する。

**17** 豊太郎の嘆息・ベルリンのエリスのもとへ、再会・出産を控えたエリスの願い

（三一八・7～三二〇・8）

A 担当者が、叙述を押さえつつ豊太郎とエリスの心情をそれぞれわかりやすくまとめていたので、生徒から出た質問は叙述されていないことについての質問が出された。〈「何やらん髭の内にて言ひしが聞こえず」とあるが馭丁は何を言ったのか〉〈何とか見たまふ、この心がまへを。〉「我が心の楽しさを思ひたまへ。～よもあだし名をば名のらせたまはじ。」というエリスの言葉に対して豊太郎の思いは叙述されていないが、豊太郎はどんな思いでいたのか〉などの質問である。後者については〈エリスの愛情が重たくなっている〉〈出世の道が見えており、エリスと別れなければいけないと思っている〉〈エリスと別れなければいけないと思っているので生まれてくる子どものことを素直に喜べない〉〈エリスとの間に気持ちのずれがある〉〈エリスの自分への思いを改めて感じた〉などさまざまな考えが出された。

B 担当者が豊太郎の思いについて「栄達への羨望」と表現していたが、ここで「羨望」は不適切なので、意味を確認させ、どのように言い換えたらいいかを考えさせた。

**18** 大臣に帰国を承諾・エリスへの罪悪感・街をさまよう豊太郎（三二〇・9～三二二・14）

A 担当者は〈気づき〉〈疑問〉〈感想〉として整理しており、〈疑問〉については自ら問い、自ら答える形で、「大臣の誘いであったことや、相沢の言葉を嘘にしたくなかったからと言って、エリスが悲しむことは想像できただろうに、なぜ豊太郎は誘いを承諾してしまったのか」に対して「愛

する女性と暮らしていくことよりも名誉や成功することの方が大事だったから」と整理し、「自分が豊太郎の立場なら『社会的地位』と『大切な人』のどちらをとるだろうか」に対して「私はこれから手に入るかどうか分からない『社会的地位』よりも今ある『大切な人』とすす方をとると思う」と考えている。疑問と解答に対して他の生徒からは、前者については同意見や補足、後者については、共感や別の考えが提示された。他には〈「あなよと思ひしが」の解釈〉〈「ああ、なんらの特操なき心ぞ」における豊太郎の思い→自らの軽率さへの後悔〉〈「炯然たる一星の火～風にもてあそぼるるに似たり」の描写の意味すること→・エリスの運命・豊太郎が空を見上げている・エリスが寝ていない部屋の中が明るい・エリスのことがぼんやりとしてきている。〉などが話し合われた。

B 「特操なき心」「炯然たる一星の火～風にもてあそぼるるに似たり」について補足説明をする。

**19** 意識を取り戻す豊太郎・相沢から真相を伝えられたエリスの精神状況・相沢の善後策

(三二二・15～三二四・7)

A 「かくまでに我をば欺きたまひしか」「机の上なりし襦袢を与へたる時、探りみて顔に押しあて、涙を流して泣きぬ」「余が病は全く癒えぬ。エリスが生ける屍を抱きて千行の涙をそそぎしは幾たびぞ」を取りあげて自らの見解を丁寧文章化して、その見解に納得し、よく理解できたという感想が述べられた。他に話し合われたことは〈「余が病床をば離れねど、これさへ心ありてにはあらずと見ゆ」の解釈。〉〈「相沢と議りて～子の生まれん折のことも頼みおきぬ」とあるが、豊太郎はどんな気持ちだったのだろうか →・エリスの姿を見ていられない、つらい・わりきれない気持ちで帰国する。申し訳ないからせめて資本を与える〉である。

B 「余が彼に隠したる顛末」の内容の確認をする。

**20** 相沢への友情と憎む心 (三二四・8～三二四・9)

A 当時の時代背景(日本・西洋)を説明後、豊太郎の人物像をまとめ、『良友』とはどういうことか、『憎い』のはなぜか、「どうすればよりよい結末を迎えることができたのだろうか」という疑問点を提示しつつ、自分の考えを説明した。話し合われたことは〈豊太郎の人物像〉〈時代背景と作品にはどんな関連があったか〉〈「されど」以下の叙述についての感想→「人知らぬ恨み」よりはやわらいでいる。・長々と書いている最初とは違う。・豊太郎にとって後の味の悪さ〉〈最終的に豊太郎は相沢をどう思っているのか〉などである。

B 「今日までも残れりけり」の意味の確認する。

次に発表者の外化を生徒がどのように内化しているかを整理していきたい。

本年度は担当範囲について「気づき・解釈・感想・疑問等」を生徒それぞれが工夫して整理し報告している。発表後のやりとりでは、まず発表内容から学んだこと・理解を深めたこと・共感したこと、すぐれていると思った点などを述べる者が多かった。また他者の発表資料を見て自身の資料作成のあり方を反省している者もいた。(1・3・4・5・6・7・8・10・12・13・14・17・19)

9) 担当者のわかりやすい整理から、話し合いの展開がスムーズに行われたものも多い。(15・16・20)

話し合われた内容を整理すると次のようである。話し合いに沿って作品理解は深められている。

- ・作品をどのように読んでいくか。(叙述に即して読むのか、自分に引きつけて読むのか)の確認。(1)
- ・作品の表現(特徴的な表現・比喩的な表現・象徴的な表現)に着目し、その意図や意味内容を考える。(2・4・6・10・14・18)

- ・難解な表現の解釈。(2)・(9)・(13)
- ・叙述に即して読んでいく中で生じた疑問の解決。(3)・(5)・(6)・(7)・(9)・(13)・(15)・(16)・(19)
- ・作品に描写されていないことの推測。(7)・(8)・(17)
- ・豊太郎の心情把握。(10)・(11)・(12)・(14)・(15)・(16)・(17)・(18)・(19)・(20)
- ・エリスの心情把握。(12)・(16)
- ・作品の内容を生徒自身と関わらせて考える。(18)
- ・作品と時代背景との関連。(20)
- ・作品の結びの意図。(20)

本年度は「『舞姫』発表学習を終えて」として次の5項目、「1. 発表資料作成」「2. 担当箇所の朗読」「3. 担当箇所の発表」「4. 話し合いの進行」「5. 発表後の質疑・感想」について「できたこと」「もう一歩だと思うこと」を書かせている。

「3. 担当箇所の発表」「5. 発表後の質疑・感想」の「できたこと」の欄に多くの生徒が書いていたことを整理すると、認知プロセスの外化にあたって、生徒が何を意識していたかがうかがえた。生徒は発表資料作成においてそれぞれが考え抜いたことを外化した(内化→外化)が、発表において外化の内容を見直している。そこには再び内化がみられる。

「3. 担当箇所の発表」における意識は二点にまとめられる。一点目は「わかりやすく」「簡潔に」「要所をおさえて」「順序を考えながら」「流れに沿って」という意識であり、二点目は「自分の考えをまとめる」という意識である。

「5. 発表後の質疑・感想」に見られる意識も二点にまとめられる。一点目は「他の人の意見を聞いて」「気づかされたことも多くあった」「分からなかったところの理解が深まった」「理解を深めることができた」「様々な見解を得られた」「疑問に思った箇所の探求、理解ができた」「自分の考えと比較し理解を深められた」「自分が少し分かりづらいついていたところについて納得することができた」というものである。他者の意見を通して、自分の理解を深めたり、見方を広げたりするという内化活動がうかがえた。二点目は、「他の人の発表に対して自分の意見を述べた」「質問や感想に対して自分の考えを持って、まとめることができた」「自分の考えを整理し発表することができた」「分からないことをメモしながら聞いて、自分の意見をまとめて質問することができた。」「質問を受けて、自分の考えをきちんと述べることができた」など、自分で考えをまとめることができたことを評価するものである。発表を聴いたあとの交流で、生徒は外化と内化を繰り返していることがわかる。

次に授業者として行った助言や介入を整理する。助言や介入は、基本的には生徒の内化活動を助けたり、深めたりするものとして行った。

- ・内容理解を深めるための問いかけをし、考えさせる
- ・違う考えが示された場合の調整をする。プリントにまとめる。
- ・作品の背景に触れる。
- ・解釈について補足説明をする。(プリント配布)
- ・担当者の表現に誤用があった場合(特に漢語)は、適切な言葉について考えさせる。
- ・生徒から出された質問が考えにくい場合は、分かりやすい問いを立てて考えさせたあと元の質問に戻る。

- ・生徒の発表で押さえ切れていない内容があった場合は補足する。
- ・内容理解のためにこれまでの展開を振り返らせる。

### 3 平成29（2017）年度の場合

生徒数は24名（男子12名・女子12名）である。生徒の発表と質疑及び授業者の補足説明に15時間かけている。

発表資料の形式は別稿で示したIのタイプで、A4版の用紙の表に、担当箇所から取りあげた三つの〈語句・文〉それぞれについて〈気づき・解釈・感想・疑問等〉をまとめさせ、裏に、〈語句の意味〉〈全体を通して一感想・考えてみたいこと〉を書かせるものである。

ほとんどの生徒が取りあげた語句・文について自らの見解を文章化していた。発表後の話し合いの内容は、発表者のまとめや考えに対する共感や賞賛、分かりにくい点への質問、発表者の考えとは違う考えの提示、発表者が指摘していない箇所についての疑問点や自身の読み取りなどであった。発表者はまとめたことに対する補足説明をしたり、質問されたことに応答したりしていた。司会者（＝発表担当者）に指名されて発言する場合もあったが、慣れてくるにしたがって自ら挙手して発言する場面も多くなった。全体として話し合いは活発であったと言える。話し合いの内容は、登場人物像、登場人物の心情にかかわるものが多かったが、表面面では比喩表現や象徴的表現、対比表現に着目し、話し合われた。話し合いの内容は焦点化され、一つの質問に対して複数の考えが出されたりしたので、内容が深まることも多かった。

資料1は24名の生徒（①～④）が取りあげていた語句・文をまとめたものである。

次に整理していることは、各担当者の発表とそのとき話し合われた主な内容である。

#### ① 回想の始まり・悔恨の思い（二九〇・1～二九二・7）

小説の冒頭で、主人公の語りが始まる箇所である。主人公の状況、日記が書けない理由を否定しつつ述べていることの表現効果、「恨み」の深さが押さえられた。

#### ② 有能な豊太郎・功名の念と勉強力とを持ちベルリンに・大学で聴講

（二九二・8～二九五・3）

秀才であり意気揚々と留学する豊太郎像が押さえられ、「政治学を修めん」と思う理由が話し合われた。

#### ③ 自我の目覚め・歴史、文学への興味（二九五・4～二九六・4）

勤勉で所動的、受動的であった豊太郎が自我に目覚め、官長にも反抗するようになったことが丁寧に説明され、特に「辞書たらんはなほ堪ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず」と述べる理由については分かりやすく整理されていたので、他の生徒もよく理解できたようだ。

#### ④ 官長や留学生仲間との不穏な関係・弱い心への省察（二九六・5～二九八・5）

豊太郎の「強がり」「弱さ」を周囲とのかかわりを絡めて、担当者独自の視点で文章化していたので、その内容について補足の説明を求めている。例えば「余が冤罪を身に負ひて」については「ここで豊太郎は、自分が『妬まれる』ことはいわれの無いことだとして、そのことを『冤罪』と表現している。豊太郎は二九七頁で『勇気がなくて皆と交流できないことを嘲り猜疑することはもっともだが、自分がこんなにも弱くてふびんな心を妬むのはおかしいことだ。』としている。つまりこの部分は豊太郎に対する批判への豊太郎の考えが簡単にまとめられている部分である。」と説明している。

#### ⑤ クロステル巷でのエリスとの出会い・エリスの涙、訴え（二九八・6～三〇一・4）



エリスが登場する場面である。エリスの美しさ、エリスに対する豊太郎の行動・思いが押さえられた。エリスのことが「彼」と表記されている疑問については生徒の間で整理された。

⑥ エリスの家へ・エリスの事情と豊太郎の援助（三〇一・５～三〇四・１）

担当者がまとめている、エリスの母「老嫗」の人物像、エリス像について意見が出された。「その見上げたる目には人に否とは言はせぬ媚態あり」についての担当者の見解「この部分では少女が登場してから、初めてエリスに対して批判的とも言える評価がなされている場面であると思う。それは今までエリスを美しい存在という風に描写していたために、人間的な部分を持ち合わせていることを示す効果を狙ったと考えられる。」を踏まえて、ここでの豊太郎の思いやエリスの意識について意見が出された。また「少女は驚き感ぜしさま見えて～熱き涙を我が手の背に注ぎつ」についての見解「(前略) エリスはどういう意図でこの行動に至ったのだろうか。(略) この行動に至る時点で感謝の念に加え、恋愛の思いも込められているように思う。」を踏まえて、エリスの思いについて話し合われた。

⑦ エリスとの交際・留学生仲間の中傷・豊太郎の解職・母の死の知らせ

(三〇四・２～三〇五・２)

「色を舞姫に漁する者」という表現に対して「こう言えば確かに『同郷の人』は自分たちと交際しようと思わず、学問ばかりえらそうにする豊太郎を非難できる。」という見方の報告を受けて、豊太郎と周囲の人との関係が話し合われた。また母からの手紙の内容について「豊太郎に看取ってほしかったとか、逢いたいとかだろうか。それとも立派に育ってありがたいだろうか。非難か。」と担当者が提示したこと、手紙の内容について考え合っていた。

⑧ エリスの生い立ち、状況・エリスとの関係の深まり（三〇五・３～三〇六・１２）

エリスの生い立ちや人物像、思い、豊太郎とエリスとの関係が押さえられた。

⑨ 相沢の周旋により新聞社の通信員に・エリスの家での生活（三〇六・１３～三〇八・３）

担当者の「やはり精神の本質が変わることはなかった。」という報告をきっかけに、豊太郎は変わったのか、変わらなかったのかという点についてさまざまな意見が出された。

⑩ 民間学に通じる豊太郎（三〇八・４～三〇九・５）

豊太郎の生活の変化が押さえられ、「我が学問は荒みぬ」の繰り返しから、豊太郎がどんな思いでいたか話し合われた。留学生に対する優越感を読み取ったり、納得のいかない結果に対して自分自身を納得させようとしているという読み取りが示された。

⑪ 明治21年の冬・エリスの妊娠の発覚・相沢からの手紙（三〇九・６～三一〇・１０）

エリスの身体の変化と豊太郎の思いが押さえられる。「言葉少なし」とあるがなぜかとか、担当者の「相沢の手紙が豊太郎とエリスの人生の転換点である」という見解を踏まえて、そのときの豊太郎の思いなどが話し合われた。

⑫ 天方伯のもとへ・エリスの思い（三一〇・１１～三一〇・９）

担当者はエリスの豊太郎への愛情、エリスの不安を押さえている。話し合われたのはここでの豊太郎の心情である。

⑬ 天方伯に謁見・相沢との再会・相沢の忠告（三一〇・１０～三一三・２）

相沢の人物像と豊太郎の思いを中心にした担当者の報告を踏まえて、相沢像がさまざま述べられた。

⑭ 相沢の指針・豊太郎の承諾、うしろめたさ（三一三・３～三一三・１７）

報告も話し合いも、エリスとの関係を押さえつつ豊太郎の心情を考えるものだった。「一種の寒

さ」に見られる豊太郎の心情については〈エリスとの別れを決意できない心〉〈心の中のもやもや〉〈エリスとの別れの予感〉〈別れのこわさ〉〈自分の弱さの認識〉〈エリスを裏切ることの後ろめたさ〉などさまざまに述べられた。表面面では「この山」の意味することの確認がなされた。

⑮ 天方伯からロシア行きの提案・豊太郎の承諾（三一四・1～三一四・16）

揺れる豊太郎の心情が押さえられた。相沢や天方伯から信頼される喜び、自分の弱さを恥じる心、エリスへのうしろめたさなどである。

⑯ 翻訳と舌人の仕事・ロシアでの活躍（三一四・17～三一六・3）

豊太郎の心情把握が中心である。エリスへの配慮、仕事への使命感、得意な気持ちなどが押さえられる。〈「拉し去りて」にはロシア行きを躊躇する気持ちが示されているのではないか〉とか〈仕事をしている時、豊太郎はエリスのことを忘れていたのではないか〉などの考えが出された。

⑰ エリスからの手紙（三一六・4～三一七・9）

エリスの手紙の内容について報告される。話し合われたのはエリスの細かい心の動きである。豊太郎から離れていることの心細さや寂しさ、つらさ、執着心などが挙げられた。母と争った内容も推測された。

⑱ 豊太郎自身の地位の明視（三一七・10～三一八・6）

「我が地位」「胸中の鏡は曇りたり」「神も知るらん」についての解釈が確認された。担当者が挙げていた「己が尽くしたる職分」という語句に関連してその前後の語句を押さえながら、豊太郎の細かい心の動きについて話し合われた。「未来の望みをつなぐことには～絶えて思ひ至らざりき」を押さえつつ、〈未来への望みは持っていたけれど、心の中で押さええて考えないようにしていた〉〈未来につなぐことはよくないと言いつつ聞かせていた〉〈未来を考えるよりも今のことを〉〈エリスのことが気にはなるが仕事を成功させたいという気持ちが強い〉などの解釈がなされている。

⑲ 豊太郎の嘆息・ベルリンのエリスのもとへ、再会（三一八・7～三一九・8）

担当者の報告に沿って、豊太郎の心の動き、豊太郎を迎えるエリスの思いについて話し合われた。〈エリスは何日待っていたのか〉とか〈エリスはずっと起きて待っていたのか〉などの質問も出された。

⑳ 出産を控えたエリスの願い（三一九・9～三二〇・8）

エリスの言動から読み取れる微妙な心の動きについて話し合われた。豊太郎に似た子供が生まれることへの喜び、豊太郎が去っていくのではないかと不安・焦りなどである。エリスの言葉に対する豊太郎の反応や言葉は叙述されてなく、そこにエリスから引いている豊太郎の気持ちが示されているのではないかと考えも出された。

㉑ 大臣に帰国を承諾・エリスへの罪悪感・街をさまよう豊太郎（三二〇・9～三二二・2）

担当者は取りあげた語句に沿いつつ、豊太郎の思いを「弱い心」「自身に対する失望」「自分のしてしまったことがエリスを裏切る行為だったことを痛感しパニックになっている」「動揺・混乱の末に豊太郎はエリスを裏切った自分を『罪人』とし、自己嫌悪、罪悪感でいっぱいになる」など説明している。担当者の疑問「ここまでエリスを裏切ったことを後悔している豊太郎だが、なぜ大臣の提案のとき、エリスのことを考えられなかったのだろう」を発端にこれまでの小説の展開を踏まえつつ、豊太郎は変わったのか、変わることはできなかったのかを軸にさまざまな意見が出された。〈人間らしさは変わったが、逆境では考えないで結論を出し、成長はあまり見られない〉〈弱さは変えられなかった〉〈出世への思いを考えると変わりきれなかった〉〈後悔の念を持つ豊太郎から考えると中途半端に変わった〉などである。

② エリスのもとへ到着（三二二・3～三二二・14）

担当者から豊太郎の混乱、自分のことを責めて思い詰めている様子、葛藤について説明があった。「炯然たる一星の火」「鷺のごとき雪片」から読み取れることが話し合わせ、エリスの運命や豊太郎の心情と重ねて考えていた。

③ 意識を取り戻す豊太郎・相沢から真相を伝えられたエリスの精神状況 ・相沢の善後策

（三二二・15～三二四・7）

担当者からは、相沢の行動に対する見解、「千行の涙」という表現に対してに対して「深い悲しみや後悔を意味していると思う。またどうにもならない状況にただ泣くことしかできず、絶望している気持ちもあると思う」という解釈、「あはれなる狂女の胎内に遺しし子」について「発狂したエリスの様子を一言でまとめている。「客観的→豊太郎は少し引いたのか。→エリスにも生まれる予定の子どもにももう会うことはないと思ったのか」という見解が報告された。話し合いにおいては相沢の考え方、豊太郎に示した方針などが確認された。

④ 相沢への友情と憎む心（三二四・8～三二四・9）

「良友」について「・職を失った豊太郎に職を与える。・豊太郎が有能な人材であるのに情に流されてエリスと交際していることを憂い、交際を断つように進言する。」「憎むころ」について「エリスに一切を話し精神を崩壊させたことに対して。・恋愛より功名を選んだ自分を相沢に重ねる」という担当者の見解をもとに話し合われた。〈「憎むころ」には豊太郎の自分自身への後悔が込められている〉とか〈エリスを日本へ連れて帰る選択肢が消えたことが「憎むころ」につながる〉などの意見が出されている。ここでも豊太郎は変わったか、変われなかったかの問題が提起され、話し合う中で〈変わりかけて変わらなかった〉ということに落ち着いた。また、なぜ「舞姫」という題なのかという問題に対して、豊太郎やエリスに関連づけて話し合われた。

本年度の交流活動は登場人物像と心情の把握を中心に展開した。発表者が独自の見解を示していたものも多く、そこから生徒たちは人間像について考え、人間観を広げたり深めたりしていた。話し合われた主な事項は次の通りである。

豊太郎の人物像・心情①②③④⑤⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔

エリスの人物像・心情⑤⑥⑧⑫⑱⑲⑳㉒㉓

エリスから豊太郎への手紙・心情⑰

エリスの母の人物像⑥

豊太郎と周囲の人との関係④⑦

母からの手紙⑦

相沢の人物像⑫⑲㉔

作品は豊太郎の語りとして展開しているので、生徒も豊太郎の心情について最も多く話し合っている。生徒はそれぞれの感性で、作者が豊太郎に語らせるために選択した言葉を捉え、考えを深めようとしている。「政治学を修めん」と思う理由（②）「辞書たらんはなほ堪ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず」と思う理由（③）を考える中で豊太郎の人物像が浮かぶが、明治という時代に思いを馳せることもできる。④では「冤罪」という語から、留学生仲間への豊太郎の評価を捉えていた。⑥では「媚態」から、豊太郎、エリス両者の心情が話し合われた。「色を舞姫に漁する者」（⑦）を留学生仲間の豊太郎非難の口実とする捉え方をもとに、豊太郎と周囲の人との関係が話し合われている。⑩では、「我が学問は荒みぬ」の繰り返しを押さえて、豊太郎の優越感や、「不本意

であるが、あえて自分自身を納得させよう」としている複雑な思いを読み取っている。「一種の寒さ」についても「寒さ」の語感を押さえて、さまざまに豊太郎の内面が説明されていた。(14) ⑭以降では豊太郎の心が大きく揺れていく。その揺れる心が生徒の中で確認されている。着目していた言葉は「拉っし去りて」(16)「我が地位」「胸中の鏡は曇りたり」「神も知るらん」「己が尽くしたる職分」「未来の望みをつなぐことには～絶えて思ひ至らざりき」(18)などである。⑮では担当者の豊太郎の思いに対する細やかな分析、疑問から、これまでの展開を踏まえつつ、豊太郎は変わったのか、変わることができなかったのかを軸に意見を出し合っている。その問題については、⑨の場面でも担当者の見解をもとに提起され、話し合われている。また⑳でも「憎む心」について考えを出し合った後、豊太郎は変わったのか変われなかったかについて、再び意見交換がなされ、変わりかけて変わらなかったという見解に落ち着いた。㉑では「炯然たる一星の火」「鷺のごとき雪片」という象徴的な表現からエリスの運命や豊太郎の心情とを読み取っていた。

「舞姫」には展開の中で詳しく描写されていない箇所があるが、その点を推測して意見を出し合うことも多く見られた。母からの手紙の内容(7)、エリスの妊娠に対する豊太郎の思い(11)、出産を控えたエリスの願いに対する思いなどである。

相沢の人物像についても、生徒各自が捉えた相沢像をそれぞれの言葉で述べあっていた。(12)㉒㉓では、相沢の行動に対する見解を出し合い、㉔では担当者が示した「良友」としての相沢像をもとに他の生徒の見方も出された。

エリスの微妙な心の動きはエリスの手紙(17)や言動(20)から読み取られている。

#### 4 おわりに

年度や発表資料の形式が違って、作品の核になる部分については同じように話し合われている。違っている点は資料の形式で意図していたことと関わっており、28年度は叙述に即して読む中で生じた疑問についての話し合い、29年度は発表者の見解をもとにして広げたり深めたりする話し合いが多かった。

いずれにしても授業中の交流において、人物像や心情、表現上の特色などについて意見交換をし、外化と内化を繰り返す中で、人間観を深めている。自分が考えたことをなんとか言葉で表現し外化した時、生徒の考えは外化する前よりも深まっている。そこには内化がある。また自分の考えを外化することで他者からの応答を受けると、また思考を働かせる。外化と内化の循環により考えは広がり、また深められると感じた。

生徒が作品全体を通して何を感じ、何を考えたかについては、まとめ学習として意見文等を書かせている。まとめ学習における認知プロセスの外化と内化については別稿で報告したい。

#### 資料1

①	○中等室の卓のほとはいと静かにて、熾熱灯の光の晴れがましきもいたづらなり。 ○日記 ○文読むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、声に应ずる響きのごとく、限りなき懐旧の情を呼び起こして、幾たびもなく我が心を苦しむ。
②	○太田豊太郎といふ名はいつも一級の首に記されたりしに、 ○洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、 ○ところの大学に入りて政治学を修めん。

③	○所動的、受動的 ○奥深く潜みたりしまことの我 ○今までは瑣瑣たる問題にも、極めて丁寧にいらいしつる余が、この頃より官長に寄する文にはしきりに法令の細目にかかづらふべきにはあらぬを論じて、ひとたび法の精神をだに得たらんには、紛々たる万事は破竹のごとくなるべしなどと広言しつ
④	○されどこれとてもその故なくてやは。 ○我が心はかの合歡といふ木の葉に似て／我が心は処女に似たり。 ○余が冤罪を身に負ひて
⑤	○少女 ○彼のごとく ○我が大胆なるにあきれたり。
⑥	○さきの老嫗は懇懇におのが無礼の振る舞ひせしを詫びて余を迎へ入れつ。 ○少女は驚き感ぜしさま見えて、余が別れのために出だしたる手を唇にあてたるが、はらはらと落つる熱き涙を我が手の背に注ぎつ。
⑦	○色を舞姫の群れに漁する者 ○我が職を解いたり。 ○我が生涯にて最も悲痛を覚えさせたる一通の書状
⑧	○余とエリスの交際は、この時まではよそ目に見るより清白なりき ○彼は幼き時より物を読むことをば、さすがに好みしかど、手に入るは卑しきコルポルタージュと唱ふる貸本屋の小説のみなりしを ○我が不時の免官を聞きし時に、彼は色を失ひつ。
⑨	○このまま郷に帰らば学成らずして汚名を負ひたる身の浮かぶ瀬あらじ。 ○この時余を助けしは今我が同行の一人なる相沢謙吉なり。 ○憂きが中にも楽しき月日を送りぬ。
⑩	○昔の法令条目の枯れ葉を紙上にかき寄せし／今は活発々たる政界の運動、文学、美術にかかはる新現象の批評 ○ビヨルネよりはむしろハイネを学びて ○我が学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。
⑪	○悪阻というものならんと初めて心づきしは母なりき。 ○さらぬだにおぼつかなきは我が身の行く未なるに、もし真なりせばいかにせまし。 ○見れば見覚えある相沢が手なるに、
⑫	○かはゆき独り子を出だしやる母もかくは心を用ぬじ。 ○何となく我が豊太郎の君とは見えず ○我をば見捨てたまはじ
⑬	○余は少し躑躅したり ○なかなか余を責めんとはせず ○意を決して断て
⑭	○されどこの山はなほ重霧の間に在りて、いつ行きつかんも、否、果たして行きつきぬとも、我が中心に満足を与えんも定かならず ○我が弱き心には思ひ定めん由なかりしが、しばらく友の言葉に従ひて、この情縁を断たん

	と約しき ○余は心の中に一種の寒さを覚えき
⑮	○余は数日間、かの公務にいとまなき相沢を見ざりしかば、この問ひは不意に余を驚かしつ ○故あればなるべし ○偽りなき我が心を厚く信じたれば
⑯	○出ていくあとに残らんも物憂かるべく、また停車場にて涙こぼしなどしたらんには後ろめ たかるべければとて、翌朝早くエリスをば母につけて知る人がり出だしやりつ ○我が舌人たる任務はたちまち余を拉し去りて、青雲の上に落としたり ○仏蘭西語を最も円滑に使ふ者は我なる
⑰	○彼は日ごとに文を寄せしかばえ忘れざりき ○これ彼が第一の文のあらましなり ○またほど経ての文はすこぶる思ひ迫りて書きたるごとくなりき
⑱	○我が地位 ○我が鈍き心 ○己が尽くしたる職分
⑲	○自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし ○よくぞ帰り来たまひし。帰り来たまはずば我が命は絶えなんを ○低徊踟躕の思ひは去りて
⑳	○よくぞ帰り来たまひし。帰り来たまはずば我が命は絶えなんを ○低徊踟躕の思ひは去りて ○よもあだし名をば名のらせたまはじ
㉑	○特操なき心 ○我が心の錯乱 ○我は許すべからぬ罪人なり
㉒	○いかにかしたまひし。御身の姿は ○死人に等しき我が面色 ○余は答へんとすれど声出でず、膝のしきりにをののかれて断つに堪へねば、椅子をつかま んとせしまでは覚えしが、そのままに地に倒れぬ
㉓	○相沢の助けにて日々の生計には窮せざりしが、この恩人は彼を精神的に殺ししなり ○エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を注ぎしは幾たびぞ ○あはれなる狂女の胎内に遺しし子
㉔	○相沢謙吉がごとき良友は世にまた得難かるべし ○されど我が脳裏に一点の彼を憎むころ今日までも残りけり ○ああ

(※⑳の生徒は担当範囲を一部間違えて⑲と語句が重なっている箇所がある。)

参考文献

『鷗外選集』(岩波書店 1979 年)

(広島大学大学院教育学研究科研究生)